

---

# マシンガン・イン・ジャズ

H野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マシンガン・イン・ジャズ

### 【Nコード】

N5437L

### 【作者名】

H野

### 【あらすじ】

ジャズを奏でるのはマシンガン。それは禁則事項です。うるせえ黙れ。どうでもいい惑星の、どうでもいい話。

リズムミカルに鳴った音は、狩猟用宇宙自動小銃の発砲によるものだっただ。

それは、タン、タタン、タタ、タンであり、タタ、タタ、タタ、タンと続いた。

追って、独特の、金切り声に似たかん高い断末魔が聞こえてきた。「ベノ星人というのは、こうやって殺すんだ」と彼は言った。「無駄な弾をつかわないように、頭にある心臓だけを撃ち続けるんだ。やってみろ」

「この惑星は狩猟禁止区域のはずだ」

「みんなやってることさ」

「おれはごめんだ」

「偽善者め」

われわれは宇宙船のなかへ戻った。予定より、地球時間で三十分ほど遅れていた。

目当ての植物を採取したら帰るつもりだったのに、最後になって、パートナーがやりたいことがあるのだと言い出した。彼は銃を持ってきていた。

いま、操縦席にはジャズが流れている。私物の銃も、ポータブル・プレイヤーも、どちらも宇宙船には持ち込みが許されていない。

「音楽はとめてくれ」とわたしは言った。「マシンに振動が伝わってしまう」

「大丈夫だ。いままでずっとやってきたが、おれは今ここにいる。出発しよう」

「地球に着いたら、きみの行動を報告させてもらう」

「嘘だろ？」彼はため息をついた。「せっかく仲間になったんじ

やないか」

「今回の人事異動が、きみの運の尽きだったということだ」冷たく、わたしは言った。

「なぜ殺してはいけないんだ？ あんたもおれも、牛を食べば豚も食う。蚊を殺せば蜘蛛をつぶす。なにをいまさら説教されなきゃいけないんだ？」

「それは生きる為だ。そう言うのならきみは、殺したベノ星人を食ってこい」

「なぜ音楽を聴いてはいけない？」彼はわたしの言葉を無視して言った。「これくらいの振動が、操作に支障をきたすとても？」

「可能性はある」

「バカだ！」彼はこぶしを、自分の膝のうえに叩きつけた。「どういつもこいつも、バカばかりだ！」

「静かにしてくれ」

「わからないのか？ 今の地球は、あんたみたいなバカで偽善者で機械的なやつばかりだ！ おかしいと思わないのか？ 今日にしたって、これっぽっちの雑草をつむただけに、おれたちは半年も地球を離れるんだ！ 大学生の『参考資料』のためだけに！ 言いつけたかったらそうすればいい。どのみちやめるつもりだったからな！」

わたしは宇宙船に離陸を促した。そうすれば、こいつは舌を噛み切るだろうと思った。

船は浮かばなかった。沸騰したやかんのような奇妙な音が鳴っていた。

「システム異常発生」という文字がモニターに映し出された。船内の温度が上がっていくのがわかった。

「音楽にやられたんだ！」わたしは激昂した。

「バカを言え！」彼はあわててシートベルトを外しながら言った。「脱出しろ！」

爆発音がジャズをかき消し、わたしは意識の底にふつとばされた。

目を覚ましたとき、わたしはシートベルトに固定されたまま、ベノ惑星の固い芝生の上において口の中は鉄の味に満ちていた。

散らばった宇宙船の残骸と共に、パートナーの遺体があった。わたしは通信機を探し始め、そのとき、異様な光景を目にすることになった。

おびただしい数のベノ星人の死体が、団子状態になってブースター発射口に詰まっていた。なぜ宇宙船が飛ばなかったのかは、もはや小学生でもわかる問題であった。

復讐心に燃えたベノ星人たちが、一丸となって宇宙船に押し寄せたのだ。たとえ自身の体が焼けつくされることになっても、彼らは突進をやめなかったのだ。

「精子みたいだ」とわたしは呟いた。

あたりには、特攻に乗り遅れたベノ星人たちが、わたしを見つめていた。

基本的に、彼らは非力な生物だ。二足歩行さえすれど、知能は地球の猿に劣るし、言語はおろか、口さえ持ち合わせていない。

われわれが宇宙船に乗っていたことが、結果的に彼らに攻撃の手段を与えたのだ。同じ状況下となった今、仮に惑星中のベノ星人たちが襲いかかってきても、わたしは勝つ自信があった。

わたしは彼らを無視し、通信機を探した。

それが無事であることがわかったとき、わたしは安堵に涙した。

「こちらIDナンバー3465678、ベノ惑星より連絡、どうぞ」

しばらくして、多少の雑音にまぎれた返事がかえってきた。

「こちら地球、どうぞ」

「緊急事態発生、惑星にて船大破、救助求む、どうぞ」

さきほどよりも長い沈黙がわたしをじらした。電波状態が悪いの  
だろうと思った。

「現在遂行中の任務を説明されたし、どうぞ」

「オオツブベノクサの採取、どうぞ」

沈黙。

「救助は不可。貴殿の家族には、十分な補償と生活を約束する、  
どうぞ」

わたしは言葉を失った。

「どういうことだ」

通信は遮断された。

噂では聞いたことがあった。

船員の救助において、その任務と照らし合わせてどうしても割に  
合わない計算となったとき、それが行われないうことを。

もつとも、それは日常の不満や退屈から生まれた、滑稽な作り話  
にしか聞こえなかった。そう思っていたのはわたしだけではないは  
ずだ。

それが今、いやというほど現実的な形となって、真実であること  
が証明された。

オオツブベノクサのために、わたしは命をちらすのだ。ばんざい。

わたしはポータブル・プレイヤーのスイッチを入れた。

それは完全に壊れていたのに、わたしにはなぜか音楽が聞こえて  
きた。

わたしは狩猟用宇宙小銃を手にした。

狙うのは、頭。

タン・タタン・タン・タタ・タタン。  
タタタ・タタタ・タタン・タタ。  
タ・タタン・タタン・タ・タン。  
タタタン・タ・タン・タタン・タタン。

(後書き)

こんなんでごめんなさい。  
もしよかったら感想ください。

散っていったベノ星人に。乾杯。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5437/>

---

マシンガン・イン・ジャズ

2010年11月23日02時10分発行